◆2021 年 11 月第 4 週の礼拝説教

■日時：2021 年 11 月 28 日（日）（アドベント）

■場所：小高伝道所

■説教題：「小高伝道所創立 118 年を迎えて」

■説教：飯島信牧師

■聖書：ヨハネによる福音書 15 章 1 節～10 節（新約 198 頁）

■讃美歌：242（主を待ち望むアドヴェント）

231（久しく待ちにし）

241（来たりたまえわれらの主よ）

アドベントを迎え、第一の蝋燭が灯りました。

小高伝道所のクリスマス礼拝は、12 月 26 日（日）、午後 3 時からを予定しています。

礼拝が再開されてから 3 度目のクリスマスになるのでしょうか。

主イエス・キリストのご降誕を感謝し、神様がイエス様を私たちに与えて下さったその恵みを、心に深く刻む時としたいと思います。

昨晩は、夜 7 時を過ぎてから小高に着きました。駅舎を始め、通りの両側は電飾で飾られ、特に小高ふれあい広場に立つ建物は、建物全体が屋根までびっしりと電飾で覆われているのに驚きました。

ところで、アドベントに入った今日ですが、改めて小高伝道所の歴史に想いを馳せたいと思います。

先月、牧師館でただ一室片付いていない部屋があり、東京から来た若い友人たちの力を借りながら片づけを終えたのですが（外に出した本箱や書類などの園舎への運び入れ、有り難うございました。一人では何も出来なくても、ここにいらっしゃる皆さんの力を合わせれば、アッと言う間に運び入れが終わり、心打たれる思いがしました）、その時、かねてから佐久間さんから言われていた『小高伝道所創立 100 年史』を見つけることが出来ました。50 頁余りの記念誌ですが、その 1 頁、1 頁に目を通す時、この伝道所の歴史が鮮やかに蘇るのを覚えました。

この教会は、今年で創立 118 年を迎えていますが、小高・原町への伝道の歴史はさらに遡り、1893（明治 26）年との記録があります。今から 128 年前です。又、1900 年には寺田先生の原町に講義所が設立され、翌 1901 年に、この小高の地で定期集会が始まります。初代の梶原長八郎牧師が中心となり、シュネーダー宣教師と 2 代目の土田熊治牧師がそれを助けたとの記録がありました。

つまり、小高の地で実質的に福音の種が蒔かれてから、今年で 120 年を迎えています。その間 17 名の牧師がこの教会で伝道の任を負い、その中で、10 年を越えて牧会された方が 3 人、4 代目の杉山元次郎牧師、11 代目の佐藤仁牧師、16 代目の安西貞子牧師であることを知りました。

佐藤牧師が書かれた文章からは、この教会が盛んであった時の様子、1964～1970 年の 7 年間、毎年行われた相双 5 教会連合の 4 泊 5 日の子ども会キャンプで、参加者 40 名の内、小高からは 20 名が参加していたことを知りました。安西牧師の文章からは、小高伝道の困難さや、乗り越えなければならない課題、又恵まれていた時代の幼稚園の様子などを知ることが出来ました。

読み終えて、神様は、小高に大切な一人の信徒を留めて置いて下さったことを思います。もし、佐久間さんがいわきに避難したままで、小高での礼拝再開の務めを負って下さらなかったら、この教会に礼拝の明りが灯ることは難しかったのではないかと思いました。
3・11 以来 8 年目に灯ったその明りは、保科先生代務のもとで、原町教会、中村教会、福島教会、名取教会など近隣の教会の牧師先生や信徒の方々の応援によって守られています。この明りを灯し続けることを神様は命ぜられている。『小高伝道所創立 100 年史』によって、改めてそのことを思わせられました。

ところで、掲載された中から、一人の方の文章をご紹介したいと思います。近藤正子さんです。この教会に導かれ、イエス様の救いに与った証しです。

「聖名を讃美、創立 100 年への感謝」

近藤正子

小高教会 100 年の歴史について一言私の思いを述べてみたいと思います。

かえりみますと、私が小学1年生の時でした。友達が日曜学校へ行くのがうらやましくて、よく後から付いて行ったものでした。でも、教会の玄関まで行くと、献金を持ってこない人はだめと言ってドアを閉めてしまうのです。それが悲しくて悲しくて、以来教会とかイエスさまとかの話が出た時は耳を塞いで我慢しました。いつか大人になったら自由に行けるかもしれないと思っていました。でも大人になるまでには、戦争もあったし、私の結婚もありました。いつのまにかイエス様などすっかり忘れておりました。しかし、イエス様は忘れてはいませんでした。3人の子供たちと、その子たちの子供（私の孫）とを教会幼稚園に送り迎えすることにより、いつの間にか教会に近づけられていました。

その孫も大きくなってしまいましたので、これからは自分の時間が沢山持てるようになると思い、それがどんなにか楽しいものかと思っていましたが、とんでもないことでした。することがないということほどつまらなくて空しいものはないのです。体の置き場がないというのか、自分がもぬけの殻になったようで、どうしようもなくなった時、ついにふらふらと迷う野良犬のように小高教会へ入り込んだのです。しかもその日はイースターと言う記念すべき大切な日でもありました。この時ほど、イエス様は私を忘れてはいなかったと感じた日はありませんでした。「続けてお出でください」といわれ、その通りにしました。以来日曜礼拝と聖書研究会は楽しくて、面白くて休めませんでした。あれほど難解だった聖書も慣れるに従って面白くなって来ました。

それにも増して感謝なのは、この地に生を受けて76年の間、苦しいこともありましたが、それよりも沢山の恵みを受けて導かれて来たということを知ったことでした。この恵みの膨大さにただ驚くばかりです。これから先も子々孫々にいたるまでその恵みに預からなければならないことを知った時、さあ、この神の愛に何として応えようかと考えさせられました。いや、こうしてイエス様につながって、また教会につながっていることこそが、私に出来るイエス様への一番の奉仕ではないかと思うようになりました。それで、安心して今までの愛は受けっぱなしと決めてしまいました。・・・12月24日のクリスマス

は私の受洗記念日でもあります。いつ思い出しても、あの受洗の日の感動は、涙のあふれるばかりです。これから先も忘れることはないと思いますが、何と、小学1年生でイエス様に憧れてから受洗までの60年間、取るに足らない私を待っていてくださったイエス様の、この忍耐強さと大らかさにはただただ頭が下がるばかりです。しかもその間も、絶えず恵みを注ぎ続けてくださいました。・・・神様の計り知れない遠大なご計画と思い、ただ驚きと感謝でいっぱいです。

この他、佐藤貴裕さんの受洗の喜び、佐久間喜美子さんの証しも載っています。私は、これらの方の文章を読み、それぞれが教会を離れた時があることを知りました。でも、近藤さんが記されているように、イエス様は近藤さんを、佐藤さんを、佐久間さんを忘れていなかったとの言葉はその通りだと思いました。今日与えられた聖書の御言葉との関わりで言えば、小高伝道所は、イエス様によって命が与えられた葡萄の幹であり、教会員はその枝です。この幹にしっかり繋がり、イエス様が命じられた戒めを守ることによって、私たちはイエス様の愛の内に留まっています。

イエス様が命じられた戒めは二つです。

第一は、神様を愛することです。心を尽くし、精神を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、即ち全身全霊をもって神様を愛し、礼拝を捧げることです。

第二は、隣人を愛することです。隣人を愛するとは、良きサマリヤ人の譬え（ルカによる福音書 10 章 25～37 節 p126）にあるように、弱くされ、助けを必要とする人の隣り人になることです。

100 年史を読み、少しだけ見えて来たことがあります。小高の地での伝道は、相双地区に建てられた 5 つの教会・伝道所の協働の業によって進められて来たことです。年表に記された牧師の働きを見ますと、原町教会を中心として、小高伝道所や浪江伝道所との協働、又鹿島栄光教会との協働が記されています。それに、中村教会を交えた 5 つの教会が力を合わせてこそ、この小高の地での伝道が前に進むことを知りました。

イエス様が命じられている二つの戒めを守り、この地に生きる人々に受け止められ、受け入れられて行く歩みが求められています。すでに伝道を始められている寺田先生ご夫妻や内藤先生のアドバイスを受けながら、地に足のついた取り組みを始めることが出来ればと思います。

アドベントを迎え、相双地区の 5 つの教会・伝道所全てに、礼拝の明りが灯る日が来る

ことを待ち望みたいと思います。

祈りましょう。